

中年女性の父親・母親への感情と幸福感との関連

目白大学人間学部心理カウンセリング学科 小野寺 敦子

【要 約】

本研究の目的は中年期の娘からみた自分の親への肯定的・否定的感情を明らかにし、その感情が現在の幸福感にどのように関連しているかを検討することであった。まず親に対する感情を、「健康群」「療養群」「死亡群」に分け検討した。その結果、「死亡群」は父親・母親に対する否定的感情は強くなかった。「健康群」「療養群」は父親と話す時には気を使い、母親のことを時にはうとうとしく感じていた。しかし母親が亡くなっている「死亡群」の娘は、母親のことを今も心に浮かべ母親を肯定的にとらえる傾向が強かった。さらに「20歳の頃に比べて現在の母親との関係が変化したかどうか」を尋ねたところ、66.2%が「変化した」と回答していた。また「変化した」と回答している女性ほど母親に対して否定的感情を強くいだく傾向が認められた。次に母親への肯定的・否定的感情と「母親の価値観との不一致」「夫と母親の不仲」時間的展望尺度の1要因である「過去へのこだわり」そして「全体的幸福感」との関連を共分散構造分析により検討した。その結果、「母親の価値観との不一致」「夫と母親の不仲」が母親への否定的感情に影響を与え、その否定的感情が「過去へのこだわり」と関連していた。そしてこの「過去へのこだわり」は「全体的幸福感」とは負の関連が認められた。しかし「母親への肯定的感情」は直接「全体的幸福感」に正の影響を与えていた。

キーワード：中年期の娘，母親，父親，全体的幸福感，共分散構造分析

問題と目的

ユングは、人の一生を太陽の変化にたとえ中年期を「人生の正午」とよび、太陽が真上を通過すると今度はそこに出来る影が逆方向に映し出されると述べている。つまり中年期とは人生の後半へと向かうその折り返しの時期だと考えられる。中年期を扱った心理学的研究は他の時期に比べて顕著に少ないが、白井（1991）、岡本（1985）、丸島（2000）岩本・無藤（2004）などの中年期研究は示唆に富む知見を提供している。また日瀧・岡本（2008）は、中年期の人々が自分の過去と未来をどのようにとらえるかを時間的展望という視点から研究している。その結果、40歳代では未来志向が強いが、50歳代になると現在志向へと転換がみられた。さらに精神的健康の指標となるGHQ28と時間的展

望との関連では、40歳代・50歳代ともに「過去の受容」が精神的健康と関連していた。すなわち中年の中で過去を肯定的にとらえ受け入れている人々は精神的に安定した生活を送っているといえよう。

大久保・杉山（2000）は、結婚し子どもをもつ中年女性たちを親世代と子ども世代の両方に挟まれた“サンドウィッチ世代”と表現している。近年の日本人の平均寿命の伸びは著しく、平成19年の厚生労働省簡易生命表では男性が79.19年、女性が85.99年になっており、40歳代・50歳代になっても自分の親が健康で元気である場合が多い。このために中年期は自分の親世代と子どもの世代に挟まれて、様々な心理的葛藤をかかえていることが予想される。しかしこうした中年期の親子関係の問題を扱った研究

は非常に少ない現状にある。そうした中で家族社会学者の春日井（1997）は、成人期の親子関係の研究はそれまでないに等しかったと指摘した上で、ライフコース・アプローチという立場から成人に達した50歳代の娘とその親との関係性を検証している。その結果、成人期前期の母親とその娘との関係は、娘が結婚し親になることにより両者の「価値の一致度」と「情緒的親密度」が高くなることを明らかにしている。娘は結婚し親になることによって「過去の母親」との体験を共有し母親と共通意識をもつ。そして母親も娘が過去の自分と同じ体験をしていることにより、娘と共通意識を強くいただくというのである。久和・梁（2008）は、サンドイッチ世代がもつ2つの親子関係をとらえる尺度を開発し、「尊重」「サポート提供意向」「サポート受領要望」という3因子を明らかにし自分の母親との関係は、介護の有無や相互の接触頻度によって影響を受けると指摘している。

心理学的見地から中年に達した子どもとその親とのかかわりについて検討した研究は、ようやく最近、着手されたばかりである。こうした心理学的研究を概観してみると成人期の親子関係は、中年期の母親と20歳代、30歳代の成人前期の娘との問題を論じている研究（Fisher, 1981；高木・柏木, 2000；北村・無藤, 2001, 2003, 2008；永田・新美・松尾, 2007；水野・島谷, 2002；富岡・高橋, 2005）と中年期の娘と高齢期の母親との関係を論じている研究（Fingerman, 1996, 2003；Clarke, Preston, Raksin & Bengtson, 1999；Sutor & Pillemer, 2000；Mottram & Hortacsu, 2005；Lefkowitz & Fingerman, 2003）とに大別することができる。しかし日本で行われている研究は、前者の中年期の母親と成人前期の娘との関係を扱った研究が中心である。例えば北村・無藤（2001）の研究では、平均年齢が29.8歳という成人期前期の娘とその母親との関係を検討している。その結果、既婚で子どもがいる専業主婦の娘は独身の娘よりも母親との親密性が高く、母親にサポートを求める気持ち強い傾向を明らかにしている。このことはFisher（1981）の知見と同様に、日本の女性も結婚や出産を機に退職し専業主婦になると、母親に対して親密な感情をもつ

ことを示唆している。また北村・無藤（2003）は同調査対象者の母親（平均年齢57.3歳）のデータを分析し、独身の娘をもつ母親よりも既婚の娘をもつ母親の方が、娘との親密性が高いことを報告している。先の家族社会学者である春日井の研究結果と合わせて考えてみるならば、既婚で子どもがいる娘とその母親との親密性は高いことがわかる。また日本では富岡・高橋（2005）がグランデット・セオリーアプローチを用いて、幼児をもつ若い母親とその母親との関係の変化を分析している。この研究では両者の関係性が変化するきっかけとなった体験のカテゴリーと母親への感情・関係性の変化カテゴリーとが提示されている。その結果、自分自身が新しい家族を形成することで母親への感情や変化が肯定的に変化する場合と否定的に変化する場合があることを示唆している。

その一方でClarke et al.（1999）、Fingerman（1996・2003）は、中年の娘と高齢の母親との関係はそれ以前の親子関係とは異なっていると指摘し、その変化の要因を分析している。例えばClarke et al.（1999）は、中年の娘と母親が対立する理由として、コミュニケーションスタイルやライフスタイルの相違、さらには子育てに対する価値観の相違をあげている。またFingerman（1996, 2003）は、中年期の娘とその母親との関係にみられる変化を緊張・対立という視点から検討している。この研究では48組の母娘（母親の平均年齢76歳、娘の平均年齢44歳）に面接調査をおこない、両者の間に生じた緊張・対立関係を①おしつけ・でしゃばり（Intrusion）②締め出し・排除（Exclusion）③口論の3つの視点から分類している。高齢期の母親と中年期の娘との間で葛藤や対立が多くなる理由についてFingermanは次のように述べている。かつては子どもの健康を管理してきた母親は、高齢になると今度は娘に病気の世話や管理を期待するようになり、親子関係の役割が逆転するようになる。高齢の母親は娘に自分の健康を気づかってほしいと期待するが、時には娘の対応に不満を感じる。その一方で娘はそうした親のケアを負担に感じるようになる。このために両者の間に以前にはなかった緊張関係が生じ、心の葛藤が対立関係へとつながる場合

があるとFingermanは指摘している。このことから高齢期にある母親と中年期の娘との間には、以前とは異なる葛藤や対立が予想され、Pillemer & Suito (2002)はこの時期の両者はアンビバレントな心理状態におかれていると指摘している。アンビバレントな心理状態というのは、“ある特定の対象に対する矛盾する感情であり、ある人に対する(例：母親に対する)肯定的感情と否定的な感情の両方がその時々によって出現してくることである”とWeiger (1991)は説明している。例えば「母親に頭に来ることもあるが、大好きである」といった感情であり、子どもは親に肯定的感情と否定的感情の両方をいだきやすいとCohler, Grunebaum & Robbins(1981); Luesher & Pillemer(1998), Pillemer & Suito (2002); Lefkowitz & Fingerman (2003); Willson, Shuey, & Elder (2003); Willson, Shuey, Elder & Wickrama (2006)は述べている。

以上、中年女性の親子関係に関する先行研究について概観してきた。その結果、結婚子どもをもつことによって、自分の母親との関係は以前よりも親密性が高まる傾向が示されていた。しかしFingermanは、高齢の母親と中年の娘との関係は緊張・対立関係にあり以前とは変化している可能性があるとして指摘していた。このFingermanの研究はアメリカ人のデータに基づくものであり、日本人の中年女性と高齢になった母親との関係を心理学的に実証的なデータにもとづいて検討した研究はこれまで行われていない。

そこで本研究では中年女性と自分の親との関係を検討することにする。中年期の娘が自分の親にいだく感情を肯定的感情と否定的感情から検討する。その際、母親に対する感情のみならず父親に対する感情にも着目する。娘からみた父親との関係について小野寺 (1984), 宇都宮 (2005) が研究をおこなっているが、いずれも調査対象が青年期の娘であり中年期以降の娘とその父親との関係を検討した研究はまだ行われていない。したがって両方の親に対する感情を比較検討し、中年期の娘からみた父親と母親への感情を明らかにし、両者への感情に差異があるのかどうかについてみていきたい。親への感

情の分析に際しては、久和・梁 (2008) が母親の介護の有無が中年期以降の親子関係の良好さに影響すると指摘していたことをふまえて、健康群、療養群とすでに死亡している群とに分けてみていくことにする。

またClarke et al. (1999)とFingerman (1996, 2003)は中年の娘とその母親との関係は変化していると指摘し、両者の間に生じた変化の原因について言及していた。したがって本研究でも中年女性に自分の母親との関係の変化の程度について尋ねることにする。また夫と母親との関係および母親の仕事や家庭に対する価値観への賛否の程度を尋ね、これらの要因と母親への感情との関連性を検討する。夫と母親との関係をとるあげるのは、Fingerman (1996) および富岡・高橋 (2005) が両者の関係性の変化や緊張・葛藤・対立の原因として夫との関係をあげているからである。母親の仕事や家庭に対する考え方に賛成かどうかは、母親は最も身近なモデルであり、娘の生き方に大きな影響を与えていると考えられるからである。そして本研究では、自分の親への肯定的感情・否定的感情と中年期の全体的幸福感とのかかわりについて言及したい。なぜならば幼少期からの親子のかかわりが、内的ワーキングモデル (IWM: Internal Working Model) の形成には重要な役割を果たしていることがこれまでのIWMの研究 (例: 数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000; 鎌田・石原・川村, 2007) から明らかにされているからである。また西田 (2000) は、母親役割の達成感が成人期女性の心理的well-beingに強く関連していることを指摘している。このことから、母親への肯定的感情・否定的感情が中年女性の幸福感に影響を与えていると予想される。したがって本論文では母親への肯定的・否定的意識が現在の幸福感に至るモデルを構成しその検証を共分散構造分析によっておこなうことにする。

方法

調査対象者

東京近郊に住む40歳から65歳までの女性に、知人を介してアンケート調査用紙を配布し郵送にて回答を回収した。その結果、362名の

女性から回答が得られた。これらの女性の婚姻状況は未婚(18名, 5.0%), 離婚(31名, 8.5%), 死別(14名, 3.9%), 既婚299名(82.6%)となっていた。分析対象者はこれら362名中, 既婚者で子どもをもつ270名の女性であった。270名の女性の平均年齢は51.3歳(SD:5.24), 夫の平均年齢は54.2歳(SD:6.16歳)であった。さらに270名の中で母親が今も健在である女性は172名であった。これら172名の女性の平均年齢は50.3歳(SD:5.11), 夫の平均年齢は53.1歳(SD:6.04)であった。

調査時期: 2008年9月

調査項目

(1) 父親/母親への肯定的・否定的感情項目: 親に対する感情を肯定的感情6項目と否定的感情6項目の両側面から尋ねることにした(すでに親が亡くなっている場合は, 振り返ってもらい回答してもらった)。肯定的感情に関する項目例: 辛い時・悲しい時には父親/母親のことを思い浮かべる。父親/母親には私の気持ちを常にわかってもらいたい(かった)。否定的感情に関する項目例: 父親/母親のことをうとうとしく感じることもある(あった)。父親/母親とはわかりあえない部分がある(あった)。父親と母親についてそれぞれ4段階評定(「全くそうではない」から「非常にそうである」)で合計24項目について回答を求めた。

(2) 母親との関係の変化について: 母親との関係が20歳の頃に比べて変化したかを明らかにするために「現在と20歳ぐらいの時と比べて, あなたとあなた自身の母親との関係は変化したと思いますか」と尋ねた。本設問に対しては「1. 変化していない」「2. あまり変化していない」「3. 少し変化した」「4. 変化した」の4段階評定で回答を求めた。

(3) 時間的展望体験尺度: 白井(1994)の尺度20項目の中から「目標指向性」因子「過去受容」因子「希望」因子の13項目を使用した。

(4) 中年女性の全体的幸福感: 中年女性の全体的幸福感を「現在, 私は幸せである」「大体において私の人生は理想に近い」「私の人生は素晴らしい状態にある」「私は人生に満足している」の4項目によって測定した。

(5) 母親と夫との関係についての評価: 母

親と夫との関係は現在, 良好か否かを尋ねる目的で「母親と夫との関係はうまくいっていない」「母親は夫の悪口を言う」の2項目を設定した。

(6) 母親の生き方や家庭・仕事に対する考え方への賛同: 母親の家庭や仕事に対する考え方に賛成か, それとも反対かを尋ねるために「母親の仕事や家庭に対する考え方に賛成である」と「母親のような生き方を私もしたい」という2項目を設定した。

(1) および(3)から(6)までの各項目に対して「1. 全くそう思わない」から「4. 非常にそう思う」までの4段階評定で回答を求めた。

(7) 現在の父親/母親の健康状態を「健康である」「病気で療養中」「すでに死亡」に分けて尋ねた。

結果と考察

1. 父親/母親に対する肯定的・否定的感情

(1) 父親への感情の3群比較(健康群, 療養群, 死亡群別)

既婚者で子どものいる中年女性270名の中で, 父親健康群(95名, 35.2%), 父親療養群(21名, 7.8%), 父親死亡群(154名, 57.0%)によって, 父親に対する感情に違いがあるかを3群の平均値を求めTukeyのHSD法による多重比較をおこなって検討した(Table 1)。父親に対する否定的な感情を示す6項目中, 3項目において3群間で有意差が認められた。「父親と話す時には気を使う(使った)」「父親は私の生活に口出しをする(した)」「父親に傷つくことを言われる(言われた)」の3項目では父親健康群と療養群の平均値が父親死亡群よりも有意に高くなっていた。このことは父親が今も健在でいる場合, 父親に気を使ったり, 父親が生活に口を出してくると感じていることを示している。また「父親に傷つくことを言われる(言われた)」では父親死亡群の平均値が一番低くなっていた。それに対して父親への肯定的感情として設定した6項目では有意差がみられたのは, 「辛い時・悲しいときには父親のことを思い浮かべる」の1項目だけであった。

Table1 親に対する感情項目の3群比較 (健康群・療養群・死亡群) (平均値と標準偏差値を示す)

項目	健康群	療養群	死亡群	F 値	多重比較
1. 父親と話す時には気を使う (使った) 母親と話す時には気を使う (使った)	父健康群2.45 (85) 母健康群2.04 (80)	父療養群2.30 (90) 母療養群2.14 (87)	父死亡群2.16 (84) 母死亡群1.84 (78)	3.43* 2.60	健・療>死 n.s.
2. 父親のことをうっとおしく感じる (あった) 母親のことをうっとおしく感じる (あった)	父健康群2.37 (83) 母健康群2.38 (94)	父療養群2.38 (1.02) 母療養群2.17 (91)	父死亡群2.10 (90) 母死亡群1.93 (82)	2.98 7.18***	n.s. 健・療>死
3. 父親とはわかりあえない部分がある (あった) 母親とはわかりあえない部分がある (あった)	父健康群2.44 (76) 母健康群2.40 (85)	父療養群2.57 (87) 母療養群2.42 (91)	父死亡群2.31 (80) 母死亡群2.12 (76)	1.59 3.57*	n.s. 療・健>死
4. 父親は私の生活に口出しする (した) 母親は私の生活に口出しする (した)	父健康群1.81 (93) 母健康群1.89 (97)	父療養群1.76 (77) 母療養群1.83 (97)	父死亡群1.50 (72) 母死亡群1.57 (79)	4.73** 361*	健・療>死 健・療>死
5. 父親と私は意見が対立することが多い (かった) 母親と私は意見が対立することが多い (かった)	父健康群2.06 (81) 母健康群2.13 (86)	父療養群2.19 (1.08) 母療養群2.17 (94)	父死亡群1.87 (75) 母死亡群1.82 (69)	2.64 4.79**	n.s. 健・療>死
6. 父親に傷つくことを言われる (言われた) 母親に傷つくことを言われる (言われた)	父健康群1.96 (92) 母健康群2.05 (99)	父療養群1.95 (1.07) 母療養群2.22 (1.04)	父死亡群1.60 (76) 母死亡群1.58 (73)	5.74** 10.06***	健・療>死 療・健>死
7. 困ったときには父親にこれよりかきかきく (きいた) 困ったときには母親にこれよりかきかきく (きいた)	父健康群2.07 (73) 母健康群2.51 (88)	父療養群2.00 (78) 母療養群2.72 (78)	父死亡群2.10 (89) 母死亡群2.50 (92)	.16 .95	n.s. n.s.
8. 辛い時・悲しい時には父親のことを思い浮かべる 辛い時・悲しい時には母親のことを思い浮かべる	父健康群2.23 (79) 母健康群2.51 (1.01)	父療養群2.29 (1.06) 母療養群2.67 (93)	父死亡群2.55 (99) 母死亡群2.92 (93)	3.53* 5.11**	死>療・健 死>療・健
9. 父親に私の気持ちに常にかわかってもらいたい (かった) 母親に私の気持ちに常にかわかってもらいたい (かった)	父健康群2.43 (74) 母健康群2.48 (74)	父療養群2.38 (87) 母療養群2.89 (88)	父死亡群2.35 (77) 母死亡群2.68 (88)	.33 4.31**	n.s. 死>療・健
10. 何か重要な決定をする時には父親に意見を求める (求めた) 何か重要な決定をする時には母親に意見を求める (求めた)	父健康群2.18 (76) 母健康群2.32 (83)	父療養群2.05 (92) 母療養群2.44 (81)	父死亡群2.25 (87) 母死亡群2.43 (85)	.61 .58	n.s. n.s.
11. 何かする時には父親に励ましてもらいたい (かった) 何かする時には母親に励ましてもらいたい (かった)	父健康群2.27 (75) 母健康群2.45 (86)	父療養群2.43 (87) 母療養群2.69 (79)	父死亡群2.36 (82) 母死亡群2.57 (89)	.48 1.38	n.s. n.s.
12. 父親は私の心の支えである (あった) 母親は私の心の支えである (あった)	父健康群2.54 (77) 母健康群2.68 (91)	父療養群2.62 (1.02) 母療養群2.89 (82)	父死亡群2.69 (90) 母死亡群3.07 (88)	.99 5.49**	n.s. 死・療>健

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

(2) 母親への感情の3群比較(健康群, 療養群, 死亡群)

(1) 同様, 既婚者で子どもがいる中年女性の270名が, 自分の母親に対してどのような感情をいっているのかを明らかにするために設定した12項目について検討した。分析では, 母親が今も健在で健康である場合を母親健康群(136名, 50.4%), 病気で療養中を母親療養群(36名, 13.3%), すでに死亡している場合を母親死亡群(98名, 36.3%)とし各群の平均値を求め3群間での差の比較を一元配置の分散分析およびTukeyのHSD法による多重比較をおこなった(Table1)。その結果, 母親に対する否定的感情を示す5項目において3群間に有意な差が認められた。多重比較の結果, 健康・療養>死亡群あるいは療養・健康>死亡群という結果になり死亡群の平均値は有意に低い傾向がみられた。すでに母親が死亡している娘は母親がうっとうしかった, 対立していた, お互いわかりあえないことがあったととらえる傾向が他の2群に比べ低いことになる。しかし, 現在も健康あるいは病気などの理由で療養中の母親とは意見の対立が多く, お互いがわかり合えない部分もあるととらえる傾向があった。

一方, 母親への肯定的感情を示す項目においては, 6項目中3項目において有意な差が3群間で認められた。多重比較の結果, 「辛い時・悲しい時には母親のことを思い浮かべる」では死亡>療養・健康, 療養>健康「母親に私の気持ちを常にわかってもらいたい(かった)」死亡>療養・健康, 療養>健康「母親は私の心の支えである(あった)」死亡・療養>健康となっていた。すなわち, すでに母親が亡くなっていたり現在, 療養中である場合には, 辛い時には母親のことを思い浮かべ, 気持ちをわかてもらいたかったという意識がより強いようである。

2. 母親への感情項目の因子分析

1の(2)で取り上げた母親への感情を測定するための12項目について因子分析を実施した。12項目の相関行列を求め, 主因子法による因子分析を実施し, さらにバリマックス回転を行ったところ2因子を抽出した(()内に負荷量を示す)。第1因子では「母親に傷つくことを

言われる」(.852), 「母親と私は意見が対立することが多い」(.831), 「母親のことをうっとうしく感じることもある」(.737), 「母親とはわかりあえない部分がある」(.728), 「母親は私の生活(例: 夫・子どものことなど)に口出しする」(.614), 「母親と話す時には気をを使う」(.514)となっており「否定的感情」と命名した(因子寄与率36.0%)。第2因子では「何か重要な決定をする時には母親に意見を求める」(.793), 「何かする時には母親に励ましてもらいたい」(.766), 「困ったときには母親にこれでよいかどうかきく」(.687), 「母親は私の心の支えである」(.650), 「辛いとき・悲しいときには母親のことを思い浮かべる」(.601), 「母親には私の気持ちを常にわかってもらいたい」(.562)で負荷量が高く「肯定的感情」と命名した(因子寄与率は24.3%)。2つの因子の累積寄与率は60.3%であった。それぞれの因子の6項目ずつの素点を合計し項目数でわった得点を尺度得点とした。信頼性係数(クロンバックの α 係数)は第1因子が.861, 第2因子が.834であった。

3. 中年の娘とその母親との間に生じる変化

娘は結婚することで, それまでの母親という最も身近な関係に加えて, 夫婦関係さらには自分の子どもとの関係を築くようになる。それにより結婚以前の母親と娘との関係に何らかの変化は生じるのだろうか。そうした変化をどの程度の中年女性が感じているかを明らかにするために, 20歳の頃に比べて現在の母親との関係は変化しているかどうかを尋ねた。その結果, 母親が今も健在で夫のいる女性たち(172名)の中で「変化していない」と回答した者は13人(7.6%), 「あまり変化していない」と回答した者は45人(26.2%), 「少し変化した」と回答した者は62人(36.0%), 「変化した」と回答した者は52人(30.2%)であった(Figure 1)。このことから中年女性の66.2%が母親との関係は結婚後に変化していると考えていることがわかった。

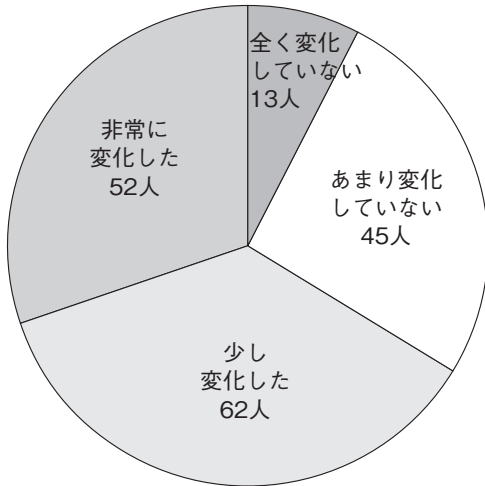


Figure1 『20歳の頃に比べて母親との関係は変化しましたか』に対する回答（人数）

4. 中年女性の時間的展望体験項目の因子分析結果

中年期の女性が自分の過去や将来をどのように考えているかを検討するために白井（1994）による時間的展望体験項目13項目を使用した。その構造を明らかにするために13項目の相関行列を求め、主因子法による因子分析を実施し因子間に相関があることが予想されたので、斜交プロマックス回転をおこなったところ4因子が抽出された。その結果「私の将来には希望がもてる」は因子負荷量が.400以下であったため、この項目を除き再度、12項目での因子分析を行ったところ次のような結果になった。第1因子では「私にはだいたいの将来計画がある」(.955)「私には将来の目標がある」(.874)「将来のためを考えて今から準備していることがある」(.858)の3因子で因子負荷量が高く、白井の先行研究と同様に「目標指向性」と命名した。第2因子では「私には未来がない気がする」(.709)「私の将来は漠然としていてつかみどころがない」(.634)「10年後、私はどうなのかよくわからない」(.560)「将来のことはあまり考えたくない」(.522)において因子負荷量が高かったので「希望」因子とした（すべての項目は逆転項目である）。さらに第3因子では「私の過去はつらいことばかりだった」

(.767)「私は過去の出来事にこだわっている」(.548)「過去のことはあまり思い出したくない」(.451)で因子負荷量が高く「過去へのこだわり」因子とした。第4因子では「自分の将来は自分で切り開く自信がある」(.543)と「私は自分の過去を受け入れることができる」(.541)の2項目で因子負荷量が高かったので「過去の受け入れ」因子とした。白井（1994）の因子分析結果では本因子分析で得られた第3因子と第4因子が1つの因子とまとまっていたが、今回の分析では別々の因子として抽出されたので、異なる因子名をつけて使用することにした。次にこれら4因子の α 係数を算出したところ、第1因子より.913、.678、.615、.434という結果になった。「過去の受け入れ」因子と命名した第4因子の α 係数が顕著に低かったことから、この下位尺度は本分析では除くことにした。

5. 中年女性の母親への肯定的・否定的感情と全体的幸福感との関係

(1) 全体的幸福感得点

中年女性の全体的幸福感を「現在、私は幸せである」「大体において私の人生は理想に近い」「私の人生は素晴らしい状態にある」「私は人生に満足している」の4項目によって測定し、その素点を合計し項目数で割りそれを「全体的幸福感」得点とした。 α 係数は.861であった。

(2) 母親への感情と全体的幸福感との関係モデル

20歳の頃に比べて母親との関係は変化したとする回答が66.2%となっていた。そうした変化と母親への肯定的感情得点と否定的感情得点との相関係数を求めたところ、肯定的感情得点とは-.079、否定的感情得点とは.323 ($p < .001$)という数値が得られた。このことは母親との関係が変化したととらえている中年女性は母親に対して否定的感情を強くいっていると考えられよう。本研究では母親への感情が変化する要因として自分の夫と母親との関係および母親の生き方や家庭や仕事への価値観への賛同を想定した。夫と母親との不仲の程度を明らかにする項目として「母親と夫との関係はうまくいっていない」と「母親は夫の悪口を言う」を設定し、

Table2 尺度得点間の相関係数

	2	3	4	5	6	7	8
1. 目標指向	.449***	-.006	.128	.050	.231**	-.076	.002
2. 希望		-.273***	.141	-.126	.282***	-.228	-.167*
3. 過去へのこだわり			-.057	.282***	-.311***	-.199**	-.191**
4. 母親への肯定的感情				-.206**	.105	.533***	-.174*
5. 母親への否定的感情					-.043	-.479***	.328***
6. 全体的幸福感						-.325***	-.153*
7. 母親の価値観との不一致							.180*
8. 夫と母親の不仲							

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

両項目の素点の合計点を算出し平均値を使って「夫と母親の不仲」得点とした。(両項目の相関係数は.464 $p < .001$)。また母親の家庭や仕事に対する考え方に賛成か、それとも反対かを明らかにする目的で「母親の仕事や家庭に対する考え方に賛成である」と「母親のような生き方を私もしたい」の項目を設定した。やはり両項目の素点を合計して算出した平均点を使って「母親の価値観との不一致」得点とした(価値観の不一致得点を算出するために、得点を逆転させて計算した。両項目の相関係数は.603 $p < .001$ であった)。

「夫と母親の不仲」や「母親の価値観との不一致」が中年期の母親への感情とどのように関係しているのか、さらにそうした感情が現在の全体的幸福感とどのように関連しているかについてのモデルを設定し、共分散構造分析によってそのモデルの検証をおこなった。

(3) 全変数の相関係数

モデルの検証に際してまず本分析で使用する「母親への肯定的感情」「母親への否定的感情」「夫と母親の不仲」「母親の価値観との不一致」時間的展望体験の3因子「目標指向」「希望」「過去へのこだわり」さらには「全体的幸福感」との相関係数を求め変数間の関連を検討した。その結果をTable2に示す。

(4) モデルの検討

「夫と母親の不仲」「母親の価値観との不一致」が現在の中年女性の母親への肯定的・否定的感情に影響し、その感情が時間的展望尺度の中の「過去へのこだわり」さらには全体的幸福

感へと影響を及ぼすという仮説モデルを作成し、最尤法による共分散構造分析(SEM)を用いてその検討をおこなった(Figure2)。今回の分析で使用する変数はすべて潜在変数であった。「過去へのこだわり」尺度はTable2において「母親への否定的感情」と有意な正の相関がみとめられていたので使用することにした。

その結果、モデル全体の適合度指標はGFI = .841, AGFI = .765, RMSEA = .066となっていた。Figure2にはパスの係数が5%水準で統計的に有意になったものを示してある。まず「夫と母親の不仲」と「母親の価値観との不一致」から母親への「肯定感情」と「否定感情」へと直接のパスを想定した。その結果、「夫と母親の不仲」から母親への「否定的感情」へは正の影響(.23)が、「母親の価値観との不一致」から同変数へは正の影響(.56)が得られた。すなわち母親と夫が不仲であり、母親の仕事や家庭に対する価値観と自分の価値観とが異なる場合、母親に否定的感情を抱く傾向があることが示された。その一方の「肯定的感情」へは「母親の価値観との不一致」とは負の影響がみられた(-.73)が「夫と母親の不仲」から「肯定的感情」へは有意な数値は得られなかった。次に「否定的感情」から「過去へのこだわり」に対しては正の有意な影響(.18)が、その「過去へのこだわり」から「全体的幸福感」へは負の有意な影響(-.70)が認められた。しかし「肯定的感情」から「過去へのこだわり」には有意なパス係数は示されず、直接「全体的幸福感」に対して正の影響(.16)が認められた。これは「母親への

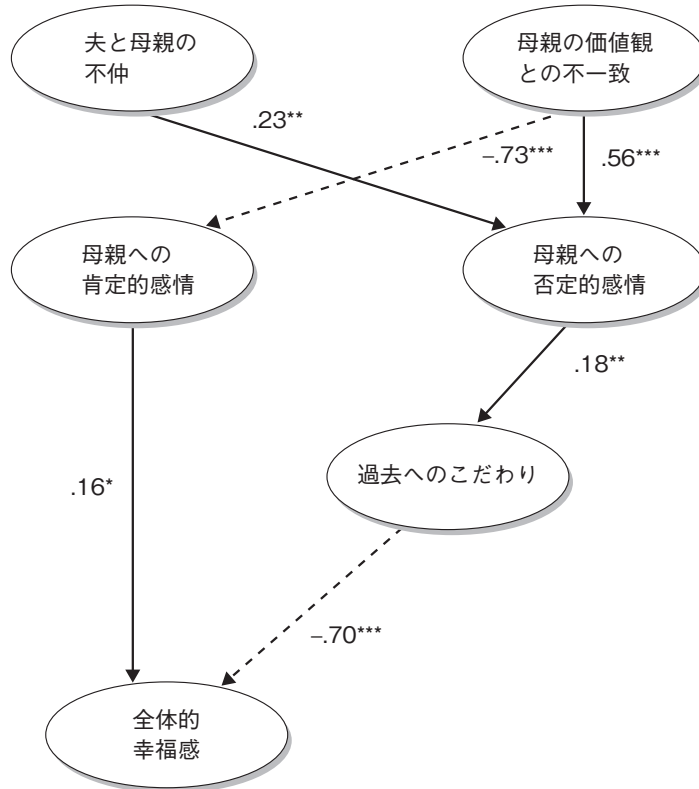


Figure 2 中年の娘と母親との関係が全体的幸福感へと向かうモデルと分析結果

注. 数値は標準化された因果係数を表す。また誤差変数は省略した。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

否定的感情」から「過去へのこだわり」へ至りそして「全体的幸福感」に対しても負の影響が示されたことになる。それに対して母親に肯定的感情を抱く場合は、全体的幸福感も高くなる影響が認められた。

総合考察

本研究では中年女性からみた自分の親とりわけ母親への感情が現在の幸福感とどのように関連しているかを検討した。まず父親／母親が今も「健康である」「療養中である」「すでに死亡している」かによって親への感情がどのように異なるかを父母別に比較検討した。その結果、親への否定的感情に関する項目を3群間で比較検討した結果、母親の「健康群」・「療養群」では、母親を口うるさくうっとうしい存在と感

じ、意見の対立やわかり合えない部分もあると思う傾向が強いが、親が亡くなっている「死亡」群ではそうした否定的な感情が弱いことが明らかになった。母親への肯定的感情として設定した6項目では、「辛い時・悲しい時には母親のことを思い浮かべる」「母親に私の気持ちを常にわかってもらいたい(かった)」「母親は私の心の支えである」の3項目の得点に3群間で有意差が認められた。母親がすでに亡くなっている死亡群の平均値が有意に高く、次に療養群、健康群となっていた。それに対して父親の場合は「辛い時・悲しい時には父親のことを思い浮かべる」の1項目においてのみ3群間で有意な差が認められるだけであった。

このように中年女性からみた父親・母親への感情を検討した結果、高齢になった父親や母親

が今も健在である場合には、親をうっとうしいと感じ否定的な感情をいだくが、親が亡くなってしまうとそうした否定的感情は薄れる傾向がみられた。特にすでに亡くなっている母親への肯定的な感情は、今も健康あるいは療養中の母親への肯定的感情よりも有意に高かったことは注目したい点である。なぜならば、50歳をすぎ中年になっても女性は、母親を依然として心の拠りどころとしており、その傾向は母親が亡くなると以前よりも強くなることが予想される。ボウルビイの愛着理論やエリクソンの基本的信頼の概念では、幼少期に親とりわけ母親との間にしっかりとした情緒的結び付きが形成される必要がある、それが内的ワーキングモデルとして大人になってからも機能することが提唱されている。母親が生きている、いないにかかわらず、中年に達した娘の心の中で母親は今なお内的ワーキングモデルとして大きな機能を果たしていることが推察された。

また母親がまだ健康である場合、すでに一人前の大人になっている自分の生活に口出しをしてくる母親を、うるさい、うっとうしいと感じることもある反面、自分の気持ちを理解してほしい・わかってほしいと思う、両方の気持ちが中年期の娘の中に共存していると理解できよう。Pillemer & Suiter (2002) は、中年期の娘たちは母親に対してアンビバレントな感情をいだいていると指摘している。こうした先行研究からも自分の母親に対して中年期以降、肯定的感情と否定的感情の両方をいだいていることが予想された。

この分析で注目したいのは、これまで取り上げられることのなかった中年の娘からみた父親への感情を検討した点である。分析の結果、中年期の娘は自分の母親に対して話す時に気を使う(使った)という傾向が3群間にはみられていなかったが、父親にはその傾向が認められていた。日本人の母親と娘との関係は「一卵性母娘」と言われるほど、仲が良いという特徴がある(柏木・大野・平山, 2006)。それに対し、父親の家庭における存在は非常に希薄であり、子どもとのかかわりも少ないと言われている。本分析結果は、母親とは話やすく親密な関係であるのに父親と話すと時に気を使い、疎遠であると

いう日本人の父娘関係の特徴を示しているといえよう。今後、本研究で得られた成人期の娘と父親との関係を示す知見をさらに発展させた心理学的研究が必要であろう。

さて中年となった娘とその母親との関係を検討した研究では、なんらかの変化が親子関係に起きている場合が多いことが示されている。例えばFingerman (2003) は、中年期の娘と親との関係は、自分と親とが再接近しかつての問題が和解する時期でもあるが、緊張状態や家族問題に直面する時期でもあると述べ、親子関係が緊張・対立する原因について言及していた。そこで本研究でも20歳の頃に比べて現在の母親との関係は変化しているかを尋ねたところ、母親が今も健康で元気である女性たち172名の中で、母親との関係が変化したとらえる女性たちが66%以上いた。

そこで本研究では、「夫と母親の不仲」「母親の価値観との不一致」が現在の母親に対する肯定的感情と否定的感情にどのように関連しているのか、そうした母親への感情が現在の幸福感にどのように関連しているかを検討するモデルを設定し、そのモデルの適合性を共分散構造分析によって検証した。共分散構造分析の結果、「母親の価値観との不一致」および「夫と母親の不仲」は否定的感情に正の影響を与え、その母親への否定的感情が「過去へのこだわり」と関連していた。本研究で設定した「母親の価値観との不一致」という要因は、Fingerman (2003) が母親との対立要因としてあげていた「仕事への位置づけ」と「家事の維持」(家事や家の修理などをめぐる対立)に近い要因といえよう。母親たちは、子どもを産み育て家庭を守ることこそが女性の務めであり幸せであるという伝統的な性役割観を身につけてきた世代である。それに対し中年世代は戦後に生まれ伝統的な性役割観に縛られることなく自分のやりたいことを追求する新しい価値観の中で育ってきた世代である。したがって母親のような伝統的な生き方ではなく、仕事を含め自分のやりたいことを実現させたいと思う女性は、母親の価値観に反発を感じる場合もあると推察される。すなわちFingerman (2003) の研究と同様に日本でも母親との価値観のズレが両者の関係を変化させて

いるといえよう。

またもう1つの要因である「夫と母親の不仲」も母親への否定的感情に影響を及ぼしていた。富岡・高橋（2005）が面接法により母親との関係の変化要因を尋ねた研究でも、夫との新しい家族を形成したことが自分の母親との関係を変化させていることが指摘されていた。自分が信頼を寄せ結婚している配偶者に対し母親も好印象をもってくれることを娘は期待する。しかし、心の拠り所である自分の母親と夫が何らかの理由で対立すると、娘は夫と子どもを守る立場を取ることから、夫の悪口を言う母親に対し否定的感情をもつことが推測される。これまで自分の夫と実家の母親との関係をとりあげた心理学的研究は日本では全く行われていないことから、本研究は今後の成人期の家族研究に何らかの貢献ができたと考えられる。

さて、この母親への否定的感情は、時間的展望体験尺度の「過去へのこだわり」に正の影響を与えていた。「過去へのこだわり」は「過去のことはあまり思い出したくない」「私の過去は辛いことばかりだった」「私は過去の出来事にこだわっている」より構成されている。今回は「過去の出来事」の内容を具体的に尋ねていないが、母親との葛藤や対立がそうした過去の出来事には含まれている可能性も考えられる。今後は過去の出来事がどのようなことであったのかも明らかにする必要がある。母親に対して否定的な感情が強い場合、自分の過去のことは今も思い出したくないと思ったり、その過去にこだわる傾向が強かった。さらにこの「過去へのこだわり」から「全体的幸福感」へは負の影響があったことから、過去にこだわっている場合は現在の幸福感は低いことが推測された。中年期の時間的展望と精神的健康との関係を検討した日潟・岡本（2008）が中年期において過去を受容できていない場合、精神的健康度が低くなると指摘していたが、これは本研究の結果を裏付ける報告であると理解できる。

一方の「肯定的感情」は「母親の価値観との不一致」からは負の有意なパスが認められたが「夫と母親の不仲」からは有意なパスは認められなかった。つまり否定的感情とは逆に母親と自分の価値観が近い場合には母親に対して肯定

的感情をいだく傾向があると理解できる。そして「肯定的感情」から「全体的幸福感」へは正の有意な影響が認められ、母親に対する肯定的な感情は、中年女性の幸福感全体を高める可能性が示唆された。しかしこの「肯定的感情」は「否定的感情」のように「過去へのこだわり」との関連性は全くみられなかった。自分と価値観に近い母親と良好な関係を中年期に至っても築いていることが、中年女性の幸福感につながっているといえよう。すでに中年に達している娘が自分の母親を心のよりどころとし、時には心の支えとすることで、現在の自分が幸せであると感じる傾向が強いのである。幼児期の子どもにとって母親は心の安全基地の機能を果たしていると考えられるが、この機能は、成人した娘の心の中において、今なお働いている可能性があることを本結果は示唆しているといえよう。

今回のアンケート調査では母親との関係が変化したかどうかを尋ねているが、その変化の方向性にまでは言及していなかった。若い頃に比べて母親との関係が悪くなったというマイナスの変化と、母親との関係が改善しよくなったというプラスの変化、その両方の変化を今後は検討していきたい。また母親との関係が変化する要因として「夫と母親とが不仲」であることを取り上げているが、今後は娘自身の夫婦関係の善し悪しも変数としてとりあげる必要があるだろう。もし娘の夫婦関係が悪かった場合、母親は娘の味方となり、あえて娘の夫の悪口を言ったり対立する可能性もあるからである。

近年、日本人の平均寿命は80歳代に入ったが、多くの高齢者は元気に生き生きと暮らしている。それにともない、40歳代から50歳代の中年になった娘たちと父親・母親との関係は、半世紀以上にわたって継続されていく人生でもっと長い人間関係になっている。したがって今後、高齢化が進んでいく日本社会の中で、中年以降の子どもとその親との関係を生涯発達心理学の視点から研究する意義はますます大きくなるといえよう。

【引用文献】

- Clarke, E. J., Preston, M. Raksin, J., & Bengtson, V. (1999). Types of conflicts and tensions between older parents and adult children. *Gerontologist*, 39, 261-270.
- Cohler, B., Grunebaum, H. U., & Robbins, D.M. (1981). Mothers, grandmothers and daughters: Personality and child-care in three generation families. New York: Wiley.
- Fingerman, K. (1996). Sources of tension in the aging mother and adult daughter relationship. *Psychology and Aging*, 11, 591-606.
- Fingerman, K. (2003). Mothers and their adult daughters. Prometheus Books, New York.
- Fisher, L. R. (1981). Transitions in the mother-daughter relationship. *Journal of Marriage and the Family*, 45, 187-192.
- 日潟淳子・岡本祐子 (2008). 中年期の時間的展望と精神的健康との関連: 40歳代, 50歳代, 60歳代の年代別による検討. *発達心理学研究*, 19, 144-156.
- 岩本純子・無藤隆 (2004). 中年期の多次元的自己概念における発達の特徴—自己に対する関心と評価の相互作用という観点から—*教育心理学研究*, 52, 382-391.
- 鎌田佳奈美・石原あや・川村千恵子 (2007). 乳幼児をもつ母親の内的ワーキングモデルと社会支援に対する態度との関連. *大阪府立大学看護学部紀要*, 13, 1-8.
- 柏木恵子・大野祥子・平山順子 (2006). 家族心理学への招待—今, 日本の家族は? 家族の未来は?. 京都: ミネルヴァ書房.
- 春日井典子 (1997). *ライフコースと親子関係*. 行路社.
- 数井みゆき, 遠藤利彦, 田中亜希子, 坂上裕子・菅沼真樹 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達. *教育心理学研究*, 48, 323-332.
- 北村琴美・無藤隆 (2001). 成人の娘の心理的適応と母娘関係: 娘の結婚・出産というライフイベントに着目して. *発達心理学研究*, 12, 46-57.
- 北村琴美・無藤隆 (2003). 中年期女性が報告する娘との関係と心理的適応との関連. *心理学研究*, 74, 9-18.
- 北村琴美 (2008). 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性—愛着感情と抑うつ傾向, 自尊感情との関連. *心理学研究*, 79, 116-124.
- 久和 (矢代) 佐枝子・梁 明玉 (2008). サンドウィッチ世代の親子関係. 藤崎宏子・平岡公一・三輪健二 (編). *ミドル期の危機と発達*. 東京: 金子書房.
- Lefkowitz, E. S., Fingerman, K. L. (2003). Positive and negative emotional feelings and behaviors in mother-daughter ties in late life. *Journal of Family Psychology*, 17, 607-617.
- Luescher, K., & Pillemer, K. (1998). Intergenerational ambivalence: A new approach to the study of parent-child relations in later life. *Journal of Marriage and the Family*, 60, 413-425.
- 丸島玲子 (2000). 中年期の生殖性 (Generativity) の発達と自己概念との関連性について. *教育心理学研究*, 48, 52-62.
- 水野一島谷いずみ (2002). 日本における成人期の母娘関係の概念枠組みと測定尺度: 都市在住の女性を対象にした分析. *社会心理学研究*, 18, 25-38.
- Mottram, S. A., & Hortacsu, N. (2005). Adult daughter aging mother relationship over the life cycle: the Turkish case. *Journal of Aging Studies*, 19, 471-488.
- 永田忠夫・新実 明夫・松尾貴司 (2007). 初期成人期にある娘とその母親との関係—母娘システムとしての分析—. *家族心理学研究*, 21, 31-44.
- 西田裕子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的well-beingに関する研究. *教育心理学研究*, 48, 433-443.
- 岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究. *教育心理学研究*, 33, 295-306.
- 小野寺敦子 (1984). 娘からみた父親の魅力. *心理学研究*, 55, 289-295.
- 大久保孝治・杉山圭子 (2000). サンドウィッチ世代の困難. 藤崎宏子 (編). *親と子—交差するライフコース*. 京都: ミネルヴァ書房.
- Pillemer, K., & Suitor, J. J. (2002). Explaining mothers' ambivalence toward their adult children. *Journal of Marriage and Family*, 64, 602-613.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究. *心理学研究*, 65, 54-60.
- Suitor, J. J., & Pillemer, K. (2000). Did mom really love you best? Developmental histories, status transitions, and parental favoritism in later life families. *Motivation and Emotion*, 24, 105-120.
- 高木紀子・柏木恵子 (2000). 母親と娘の関係—夫との関係を中心に—. *発達研究*, 15, 79-94.
- 富岡麻由子・高橋道子 (2005). 親への移行期にある娘のとらえる母親との関係性: 再構築の過程とその要因. *東京学芸大学紀要1部門*, 56, 137

-148.

宇都宮 博 (2005). 女性青年における不安と両親の夫婦関係に関する認知—子どもの目に映る父親と母親の結婚生活コミットメント—. *教育心理学研究*, 53, 209-219.

Weiger, A. J. (1991). *Mixed emotions: Certain steps towards understanding ambivalence*. Albany: SUNY Press.

Willson, A. E., Shuey, K. M., & Elder, G. H., (2003), *Ambivalence in the relationship of adult children to aging parents and in-laws*. *Journal of Marriage and Family*, 65, 1 055-1072.

Willson, A. E., Shuey, K. M., & Elder, G. H., & Wickrama, K. A. S., (2006), *Ambivalence in mother-adult child relations: A dyadic analysis*. *Social Psychology Quarterly*, 69, 235-252.

The Relationship between Middle-Aged Daughters' Feelings toward their Fathers/Mothers and Subjective Well-being

Atsuko Onodera Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2011 vol.7

[Abstract]

The purpose of this study was to examine the relationship between the middle-aged daughters and their parents. First of all, the feelings of daughters towards their parents were compared between three groups: 「Healthy father(mother)」 group, 「Under treatment」 group, 「Deceased」 group. 「Deceased」 group exhibited the higher positive feelings towards mothers compared to other two groups. Next, the influence of the positive or negative feelings towards their healthy mothers on their subjective well-being was analyzed by means of structural equation modeling (SEM). 「The difference between mother's value and daughter's」 and 「the conflict between mothers and daughters' husbands」 showed the positive direct effect on the daughters' negative feelings towards mothers. This negative feelings influenced on the relationship change. This negative feelings related to the 「Not acceptance of past」 and 「Not acceptance of past」 negatively influenced to 「Current Happy Feelings」. But 「Positive feelings toward mothers」 directly influenced to 「Current Happy Feelings」 without mediating 「Not acceptance of past」.

keywords : Middle-aged Daughters, Aged Mothers and Fathers, Current Happy Feelings, the Structural Equation Modeling.